

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4372500670		
法人名	社会福祉法人 熊本菊寿会		
事業所名	グループホーム 大和		
所在地	熊本県熊本市北区植木町木留336-2		
自己評価作成日	平成27年2月8日	評価結果市町村受理日	平成27年3月30日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなろ福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	平成27年2月16日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

家庭的な雰囲気の中、入居者とスタッフが寄り添いながらゆっくりと過ごし、スタッフは理念の一つである「共に笑顔のある楽しい暮らし」を大切にしながら入居者の支援にあたっている。ご家族からは「遊びに来やすい」「ほっとする」とのありがたいご意見をいただいている。
 「最後まで住み慣れた場所で暮らしたい。」という本人・ご家族の希望があれば協力医や看護師、家族とともに最後までお世話させていただいている。今でも大和で看取った入居者のご家族も時折訪ねてこられることもある。
 大和のスタッフである猫の「みみ」「そら」は入居者やスタッフの癒しであり、自宅でペットを飼っておられた方にとっては大きな存在になっている。
 さらに入居者の重度化が進み(平均介護度 3.8)、スタッフは寝たきりの方に何が出来るか、どうしたらその方らしい生活ができるか、安全・安楽だけではない暮らしの支援の在り方を日々模索している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開設して15年目時の流れは家族が植樹された梅に表れ、このホームの生き様として今年も見事に開花し、春の息吹を醸し出している。今年も臥床中心の入居者に「今できる最大限のケアをしたい」と、主治医や家族及び職員同士が一致協力する等、「このホームで最期まで」との家族の思いに応えた献身的な介護姿勢を高く評価したい。管理者を中心として職員の入替わりも無く、意思疎通の良い関係が築かれ、安心・安楽な生活を支援すべく、気付きあるケアを徹底し、一日の生活の中に笑ってもらえる瞬間を職員も楽しみとして笑顔でのケアに努めている。地域に密着した生活を課題として、近隣へのホーム便りのポスティングの継続は地域住民が区の花であるひまわりを植えられる等成果が徐々に出来ており、今後も啓発の継続に期待したい。入居者9名と職員8名及び猫2匹が家族のように生活するホームは、一層の家庭的な環境が深まっている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	介護の理念は、スタッフ全員で考えたもので、六つの項目からなる。いつでも振り返ることができるように、2か所に掲げている。何か解決困難なことがあった時には理念に則って行動するようにしている。	全職員で検討した立てた6項目の介護理念は浸透し、臥床中心の生活に今何ができるか検討している。日常の音を感じてもらう等安心・安楽な生活や、困難事例時の原点として理念を捉えながら話し合う等ケア規範として理念が生かされている。重度化や認知症の進行に伴い、日々職員は寄り添いながらチームケアにまい進している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	区長さんは、時々運営会議等に参加いただいているが なかなか他の方々とは交流が持てないでいる。	重度化の中で、外に出る時間はなかなか作ることが出来ない状況にあり、地域に密着した生活を課題と認識している。ホーム便りを地域にポスティングし啓発に努めており、近隣からの見学や外周掃除の際、近隣住民との歓談等を行いながら交流促進に努めている。自治会への加入は難しい状況にあるが、環境整備費の支払いを継続し、“こどもひなの家”としての受託や区の花ひまわり等も住民の手によって植えられる等地域に徐々にではあるが、受け入れられつつある。	地域との関係について、なにか出来る事は無いかと苦慮されている。今後も挨拶を交わしながら近隣住民が立ち寄り易い環境とされることを期待したい。地域からの入居者家族から地域の情報が得られており、入居者の状況によっては地域に出かける事も検討されることを望みたい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症の対応方法などの相談には、管理者を中心に個別に行っている。しかし、現在は受け身であるためグループホームから認知症について発信していく方法を考えている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	利用者の普段の生活状況などの報告を中心に行っている。地域からの要望や意見などを聴く機会として大切にしている。この自己評価や外部評価の結果なども報告し意見を伺っている。もう少し内容を考慮し双方に実のある会を作りたいと考えている。	家族を中心とした運営推進会議であり、家族の都合に合わせた日程として年6回開催している。利用者の状況を説明し質疑応答が行われており、胃ろうについての質問は、他の家族も現実的な問題として考える機会となっている。北区役所や区長等に参加を再度依頼し、地域の情報リサーチの機会としていく意向である。	地域に開かれたサービスとしての質の確保、向上を図ることを後押しするものが運営推進会議の目的であろうかと思われる。行政は介護保険の保険者であり、地域福祉の推進役として最前線の立場であり、この会議への参加を今後も依頼されることが望まれる。行政の参加が難しいならば、地域包括支援センターや毎月訪問される介護相談員等に依頼するの一案である。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市役所からの調査などには協力しているが、なかなか関係としてはできていない。	集団指導や実地指導への参加や介護相談員の受入れ、及び事故報告等必要最小限での関わりを持っている。市の保護課との関係は築かれており、利用者状況確認訪問時に情報交換を行っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束は行わないと考えるが、気付かないうちに行っている拘束も言葉での拘束を含め、あり得るので勉強会を行ったり、お互いの言葉を注意しあったりしている。研修会への積極的参加や情報の収集などを通してより拘束をしないケアを行いたい。	“身体拘束廃止宣言”を玄関前のボードに掲げ外部にも拘束をしないことを発信し、人間としての誇りや尊厳を奪う物が拘束であると全員がその弊害を正しく認識している。管理者は高齢化・重度化の中で日々気づきを持ってケアにあたる事やベッドを壁に付ける事も拘束である等具体的に示し、職員がつい出てしまう声かけ「あぶない」等にも全員で注意喚起している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	勉強会を行い気を付けている。特に「言葉での虐待」が無いようにスタッフ同士が注意しあっている。拘束と同じように研修会への積極的参加や情報の収集などを通して自分が気づかないうちに虐待していないように気を付けたい。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	これも勉強会を行っている。以前、後見人を立てられた入居者に関しては出来る限りの協力をした。家族に対しても必要が場場合には、話し合うようにしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には必ず説明を行い納得してから、入居してもらっている。また、入居前の見学時など契約書や重要事項説明書も検討してもらっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	年3回開催している家族会の時に、家族同士で話していただく機会を作り、個人では出しにくい意見などを集約してもらい気軽に出せるようにしている。	家族には何でも遠慮なく要望等申し出て欲しいとお願いしており、訪問時に状況を報告し要望等を聞き取りし、ケアサービスに反映させている。また、家族会は、意見交換の他、家族同士の悩み等発信する機会と、ホームへ相談も寄せられている。ホーム内外の苦情相談窓口の明示と説明を行なっている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者は普段から一緒におり、話しやすい環境である。運営に関してもスタッフで話し合っている。	開設時からの管理者等ほとんど入れ替わりの無い職員体制であり、全員がチームとして予算から事業計画に至るまで合議により決定している。運営上の問題発生には、管理者が法人に上申する事としている。勤務調整ではお互いが融通し合い、管理者による年休取得の推奨等により働きやすい環境の一環としている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	ミーティング時にどうすれば働きやすくなるかなど、話し合う機会を持つようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	少なくとも月に1回は勉強会を行っている。外部の研修に参加した時には、報告等を行ってもらい全員が共有できるようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	鹿本菊池ブロック研修には必ず一人は参加するようにし、関係づくりをしている。管理者は、他のグループホームの管理者と連絡を取り合いながら交流を深めたり相談したりしている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	日々表情や行動を見てその人についての理解を深め、不安を取り除くために話に耳を傾け寄り添いながら生活している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族来訪時、スタッフから声を掛け疑問があったり要望や不安があればお聞きするようにしている。どんなことでも質問には真摯に答えるようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	見学時などではゆっくり話を聞き、必要であれば他のサービスの紹介をしたり地域の他のサービスに繋いだりしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	介護理念にも「共に」という言葉を使い、支援する側される側という考えを持たないようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	グループホームの支援の方法を押し付けるのではなく、家族がどのような生活を望んでおられるかを尋ねると共に面会時等の様子などから汲み取るように努力している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入居者の馴染みの方が尋ねてこられたら、自由にゆっくりと話ができるように援助している。いつでも来ていただけるようにお声掛けも行っている。	家族・知人の訪問は多いが、馴染みの場所（行きたい場所）への外出は難しい状態に、家族との関係性やその機能が途切れないよう手紙でいつでもどうぞと友人宛てに手紙を出す等の支援を行っている。家族との外食や、墓参お盆・正月の帰省等家族の協力を得ている。四季折々の行事や慣習等も継続して支援し、米寿の祝いも予定されている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士が良い関係を持っておられるときは、あえて間に入らずに見守るようにしている。孤立されたり様子が変わった時などは間に入るようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	在宅復帰されたり、入院された方など家族からの相談に乗ったり本人の声を聴いたりしている。入院が長くなり契約が切れた方も家族の希望等もあり時折面会に行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人一人を理解するために毎日の関わりの中で、「その人」に注目し関心を持ってケアをしている。介護度が上がり自分の思いを伝えられない方が多いので、より注意深く接したりご家族に尋ねたりしている。	認知症の進行に伴い、自分から思いを話される入居者は少なく、職員は一人ひとりと向かい合い、声かけやスキンシップを図りながら、出来る限り本人の意思を確認している。臥床中心の入居者支援として、笑顔が出ると楽しいのか等推察し、1日の中にこっと笑える日常を支援したいと全員が常に見守り、家族との話し合いにより、本人本位になるよう努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人からの話はもちろん、ご家族や友人ケアマネージャー等からも話を聞いたりしている。アセスメント時だけでは無くふとした時の気づきをスタッフ全員が共有している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日常の変化などスタッフ全員が共有するようにしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	計画策定者一人でたてるのではなく、アセスメントには必ずスタッフもかかわってもらうようにしている。できたプランも本人・ご家族の意見を取り入れることはもちろん、スタッフにも意見を聞きプランに反映させている。	日々の個別記録や申し送りノート等職員の意見や観察等が活かされ、毎月全職員でケアカンファレンスを等行っている。家族との協議前にまずはプランを作り、家族の意向等を聞き取りし新たなプランを策定している。心身の状態変化や退院時等見直しており、現状に即した具体的なプランであるが、更に毎月の話し合いの結果が援助内容に反映されることを望みたい。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別記録により情報の共有化ができています。その情報をプランだけでなく日々のケアに活かすようにしています。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	グループホームなので柔軟に対応ができていると思う。家族やスタッフと相談しながら対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の顔見知りの方を通して、グループホームの中だけでない楽しみのある生活を送っていただいている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	内科の協力医である荒武Drは週に3回は往診していただいております。入居者の状態によっては夜間や休日でも対応していただいております。入居者やご家族にも安心してもらっています。先生が来られない日も看護師を派遣してござっております。連絡が取りやすくなっています。	在宅医療に志のある協力医の往診は入居者や職員にとっても心強い存在となっており、ほとんどの入居者が主治医とされている。又、家族と一緒に馴染みのかかりつけ医を受診される方もあり、入居者・家族の希望に沿ったかかりつけ医を支援している。職員は入居者の様子観察を徹底し、必要に応じたバイタルチェックやかかりつけ医と連携し、体調維持に取り組んでいる。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	スタッフは介護看護の区別なく一緒にケアを行っている。虹の里渡鹿診療所の看護師とも密に連絡をして情報の共有を図り、適切な受診や看護を受けている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院された時には、情報提供所を作成し入院先でもできるだけグループホームと同じ生活ができるように支援している。なるべく毎日面会に行き情報交換をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に終末期の希望を必ず伺うようにしているが、状態が変わった時等変化に合わせて具体的な話をしている。看取りに関しては文章を利用してご家族と話し合い、医師・看護師・スタッフ等でチームとして本人だけでなくご家族も支えるように努力している。	重度化時や看取りについてホームで出来る支援については、入居時に指針に沿って説明し事前確認書を交わしている。状態変化に伴いその都度話し合いで方向性を定め、希望によっては医療機関や家族の協力の下、ホームでの看取りが支援されている。協力医の頻繁な訪問や管理者とのオンコール体制を取り職員の不安に対応しながら、現在も重度化された入居者のホームでの生活継続に取り組んでいる。	新入居者に関しても高齢化や重度化は否めず、今後生活上のリスクについても文書などで説明を検討される事も一案ではないかと思われる。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	応急処置の方法を学ぶと共にマニュアルを整備し、緊急時連絡先や処方箋一覧と一緒にいつでも利用できるようにしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	毎日避難経路の点検や消火器チェックを行い、居室配置図や入居者数のチェックも併せて行っている。消防署立ち合いのもと避難訓練を行っている。	今年度自主避難訓練を実施し、今後消防署立会いの訓練を行う予定である。スプリンクラーの設置が完了し、毎日避難経路の確認が夜勤者によって実施されている。自然災害については職員間で話し合い、水を備蓄しておりホームが井戸水である事から停電時に使用している。	消防署立会いの訓練が予定され、近隣にポスティングをしていく意向であり、地域への啓発や協力体制に繋がっていく事が期待される。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	その人のプライドを傷つけないように言葉遣いには注意している。できるだけ感情的にならないようにし、また大きな声は他の方が聞くと怒っているように聞こえるので穏やかでゆっくりと声掛けをするようにしている。	接遇などの研修に参加し、入居者への親しみを込めた話しかけで理念の“笑顔のある暮らし”を実践する中にも、一人ひとりの人格を尊重した対応に努めている。声のトーンや親しみが馴れ合いとならないように言葉遣いについては職員間で注意喚起し合える環境作りに努め、入居者同士の言葉についても誇りを損ねるような言い方には注意を促している。個人情報取り扱いについて同意書を交わし、守秘義務の指導など情報管理に取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	言葉に表せない方が気持ちを表出できるように、ゆっくりと話を聞いたり表情やしぐさからよみとるようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	大まかな一日の流れはあるがその人の表情や体調を見ながら、無理なく落ち着いた生活を送ることが出来るように支援している。一日に一回でも心から笑顔になれるように心がけている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	着る物を用意したりする時、その人のこだわりを大切にしながら支援をしている。着方がわからなくなってきた方もプライドに留意しながらもその人らしい装いを心掛けている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	一日のメニューを決めるときは出来るだけ入居者と相談しながら決めている。調理はその人に応じて芋の皮むきなど出来ることをしてもらっている。味見が役割の方も、役割があることで出来上がりを楽しみにされている。	季節や入居者の好みに合わせその日のメニューを決め、入居者も一緒に買い出しに出掛けたり味見や茶碗拭き等に関わっている。又、イベントとして餃子やコロッケ作り等に取り組んでいる。おせちやお雑煮・七夕団子等季節に合わせた行事食や花見弁当を楽しみ、誕生日には本人の好みを反映したり、敬老会には家族との食事会を開催している。パンの移動販売を利用し好みのパンを選ぶ楽しみやお金を使うこと等社会性を継続し、パンの日を設けている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	チェックは必要な時に必要な方だけ行っている。水分はお茶だけでなく他の飲み物なども組み合わせながらできるだけ飲んでもらっている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食事後は一人一人に応じたケアを行っている。口腔ケアの重要性を理解して取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人一人の排泄パターンを把握し、さりげなく早めに声掛けをしている。早めの声掛けをすることによって失敗を出来るだけ防ぎ自信に繋げるようにしている。	自立され自分で行かれたり、個々の排泄状況に合わせてプライバシーに配慮した声かけや誘導で、昼夜を問わずトイレでの排泄を支援している。又、個々に応じた排泄用品の使用や早めの声かけで失敗の減少や自信に繋げ、夜間の頻尿もトイレに誘導し、自立に向け支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食物繊維の多い食事や十分な水分補給に努めている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴はほぼ毎日行っており、体調や本人の意向に沿いやすい。入浴時は一人ずつ入ってもらっており、スタッフが必ず見守りを行っている。	毎日入れるように準備し、入居者の希望や主治医の指示を受け支援している。状態によっては二名介助で対応したり清拭等で清潔保持に努め、職員の見守りや介助で安全でゆっくりと支援し、長湯を楽しまれる方もおられる。又、季節の見当識としてゆずやしょうぶ湯を取り入れている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	表情やしぐさなどを見て疲れが見られるときは、部屋で休んでいただくように声掛けをしている。夜にゆっくり休んでいただくために、夕方からは入居者だけでなくスタッフも穏やかに過ごしている		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の効果や副作用について勉強を行い、こすりの変更があるときには注意深く見守るようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一日の生活の中で本人ができることは、時間がかかってもできるだけ自分でしてもらっている。時間があるときには、音楽を聴いたり折り紙やトランプなど趣味のひと時を持ってもらっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	散歩や買い物などの時には、個別に出かけている。車椅子の方は花壇の花などを眺めたりして季節感を味わってもらっている。	入居者の体調により全員での外出は難しい傾向にあり、車椅子の方等は庭の花を眺める等しながら外気浴の機会を持っている。又、近くの公園へのハイキングや買い物・ドライブ等で気分転換を図り、毎週の帰省に家族の協力が得られている。	重度化により法人施設との交流も難しくなってきた。今後も外に出たいという思いを引き出し、家族と協力し合いながらの外出を継続される期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者の中にはお金の話で不安になったり興奮される方がいらっしゃるの、話の内容には気を付けている。買い物時好きなものを買うよう声掛けして満足感を味わってもらうようにしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望があれば対応している。毎日兄弟に電話をされる方もおられる。本人からの希望がない時でもスタッフから声掛けしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	普段から施設や保育園のような装飾にならないように留意している。室温の管理も入居者への声掛けや様子を見て行っている。生活の匂いが不快なものにならないように換気等を十分に行っている。	開設時に家族の協力で植樹された梅にこれまでの歴史が感じ取れるホームは、家庭的な雰囲気の中まめな清掃や換気で快適な環境となっている。手すり代わりに廊下に置かれた小ダンスや椅子・テーブル等は温かみのある雰囲気となり、車椅子の入居者にも十分な経路を確保している。職員の活けた花々もホームの彩りとなり、カルタ取りの音が臥床された方にも感じ取れるように居室の扉を開放し9名一緒に生活が繰り広げられている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファやいすなどを配置し個々のくつろげる空間を確保している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	なるべく入居時に使い慣れた家具を持ってきてもらい、今までの生活がなるべく継続できるように心掛けしている。	入居者に合わせ、タンスや椅子・テレビ等が持ち込まれ、位牌・鉢植え等家族の想いもこもった部屋となっている。コタツに足を延ばし横になったり、家具を置かない部屋等入居者が落ち着いて過ごせるように個々に応じた居室が作られている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	本人がわかりやすいように居室の入り口には「表札」をつけて、部屋に帰るときなど確認してもらい間違いをできるだけ防いでいる。トイレには暖簾をつけ目印にしている。		